

社会科教育学ゼミの学生3名が「シティズンシップ教育研究大会2024」で発表しました

2024年10月5日（土）に日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）主催の「シティズンシップ教育研究大会2024」が開催され、北海道教育大学釧路校・社会科教育学ゼミの佐々島忠佳さん（学部2年）、藤本莉央さん（学部3年）、瀬川正義さん（学部4年）の3名が自由研究発表をしました（参照：<https://jcef.jp/project/cerc/cerc2402.html>）。

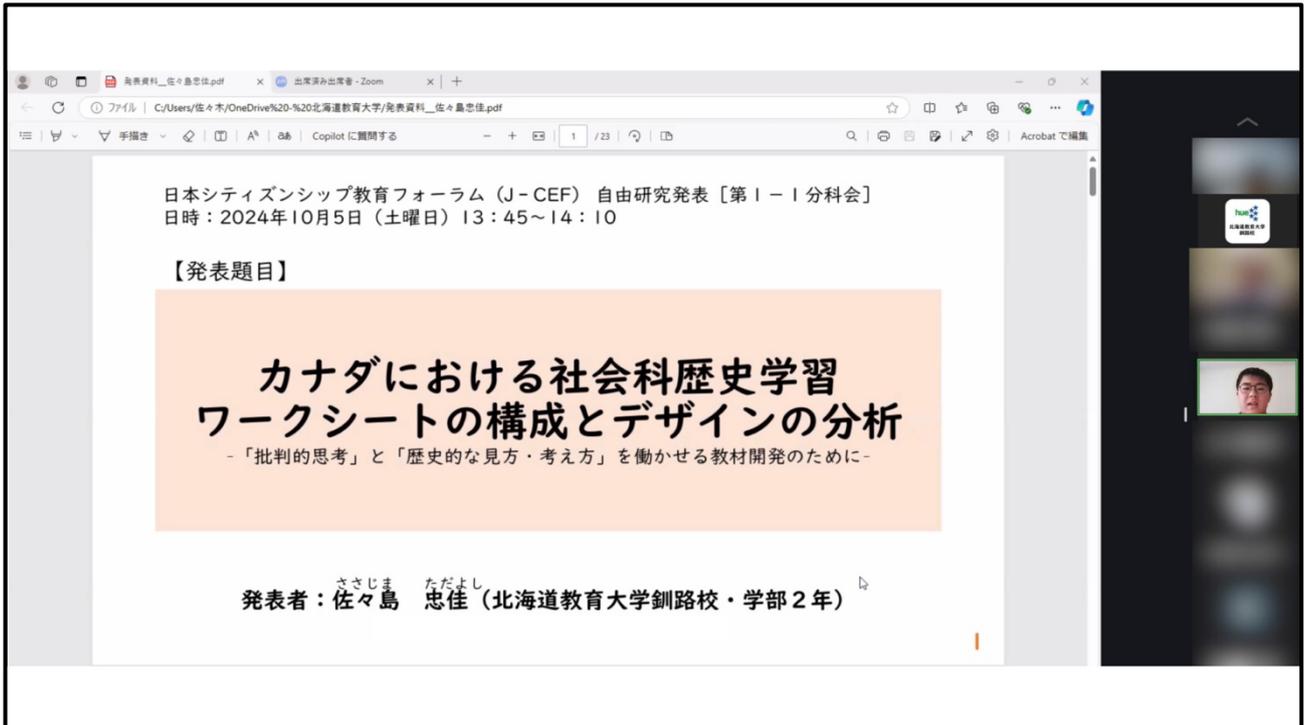
社会科教育学ゼミでは、「ゼミ活動」を調べてまとめて研究室の内側に閉じ込めるのではなく、学校現場の先生方との授業研究会で共有したり、学部生でも参加できる学術機関の研究大会で発表したりするなど、研究室の外側に発信する機会を大切にしています。自身の研究成果に慢心・盲信せず、謙虚に専門家・実務家と対話することで、調査手法を改めたり、考察を磨いたり、新たな学術的・社会的課題や実践的有用性に気づいたりし、誠実に学び続ける「科学者」としての資質・能力を身につけて欲しいと願っているからです。こうした資質・能力は、教職を含むどのような仕事でも大切であり、ゼミ内では「学士力」の一種として意味づけています。

この度の「シティズンシップ教育研究大会2024」は、普段から「批判的思考」「社会参加」「異文化理解」「シティズンシップ」などのキーワードを使い研究している学生が決して口だけで終わらず、自分自身が従来の世界観・価値観とは異なる「社会（学術コミュニティ）」に積極的に参加し、その社会で大切にされている文化や作法を学び、批判的思考を働かせたり自らのシティズンシップの再確認や変革的成長に繋がったりする機会としても意味づけました。3名の学生は、専門家集団や同世代の学部生・大学院生に揉まれ、やや荒削りな研究成果を磨くポイントや今後の調査課題に関する助言とともに、キャリア形成に向けたエンパワメントをいただきました。関係者の皆様、ありがとうございました。

さて3名の学生は、「シティズンシップ教育研究大会2024」に参加したことでどのような学びを得たのでしょうか。以下の報告書では、3名の学びを共有いたします。

文責：玉井慎也（北海道教育大学釧路校・講師）

【佐々島さんのコメント】



私は昨年の「シティズンシップ教育研究大会 2023」でも玉井慎也先生と共同発表をしましたが、今年は単独発表だったため、緊張して臨みました。参加を決めた理由は、学部1年から続けている研究内容を普段は交わらない他者に知っていただく良い機会だと考えたからです。

今回は、2年前期で進めたカナダの歴史学習ワークシートの分析結果を報告しました。発表後の質疑応答では、歴史教育を専門に研究されている大学教員、中学校や高校で社会科や地理歴史科を指導されている先生から、学校現場のワークシートの実態・課題や今後の研究課題に関する助言をいただきました。中でも、「ワークシート」に着眼することの魅力や単元の目標・内容との結びつきの中でワークシートを理解していくことの重要性に関して示唆を得られたことが参加した一番のお土産となりました。同時に、研究の自信が高まり、2年後期からのゼミ活動の意欲も高まり、タスクが明確になっています。

今回の発表を通して、オンラインで発表する際の作法と対面で発表する際の作法の違いを感じ、発表形態・場・オーディエンスに応じた発表方法を習得していく必要があると感じました。例えば、普段のゼミ内の対面研究発表に向けては Word を用いて資料を作成してきましたが、今回のオンライン研究発表では PowerPoint を用いて資料を作成しました。要点を押さえて、「どの情報を残しておくか」、「初見・初学者の方にもわかりやすく説明するにはどうしたらよいか」を考えながら発表資料の準備を進めました。

カナダ研究、ワークシート研究といった先行研究が数少ない領域であっても、専門家から意見を聞くことのでき、卒業研究に向けて多様な示唆を得る貴重な機会となります。

興味のある方は、ぜひ一緒に参加してみませんか？

【藤本さんのコメント】

【日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）・シティズンシップ教育研究大会2024】
発表分科会：自由研究発表 2-5-2
発表日時：2024年10月5日（土）16:05-16:40

【発表題目】

**「異なるものを知ろうとする市民性」を育成する
教師教育の可能性**
-教育社会学の立場から見た学習指導要領の理念実現の限界性を踏まえて-

ふじもと りお
発表者：藤本 莉央
(北海道教育大学釧路校・学部3年)



私は、今回初めて日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）の研究大会に参加し、現在関心を持って進めている研究の進捗報告をしました。社会科教育学ゼミでは、大学の1・2年生の頃からゼミの成果を同じ研究室の先輩・同期・後輩に対して報告し議論する「研究発表」がありました。しかし、今回の「シティズンシップ教育研究大会2024」のように、初対面の方々に自身の研究を発表したことはなかったため、とても貴重な機会になりました。

質疑応答では、特に、現職の教員や研究者の方からとても鋭いご指摘をいただきました。学校現場や学术界の専門家からいただいた的確なご指摘により、抽象度が高かった研究の解像度を上げる方策について示唆を得ました。

他大学の学部生や大学院生、大学教員の研究発表を聞くことも初体験でした。同じ分科会では、私が感じている問題意識と類似した発表も多くあり、私にはない視点を獲得する機会になりました。

今までは、私が通っている大学（北海道教育大学釧路校）内でしか学んでおらず、学びの機会や傾向が固定化されていました。J-CEFのオンライン研究大会のように、直接会場に行かなくても他大学の学部生や大学院生、現職教員や研究機関の専門家と関わることは、北海道東部という地理的な障壁がある大学に居ても研究活動を充実させることができます。学外で「教育」を学んでいる方々と関わることで、学び方や学ぶ相手を意図的に変えること、オンラインで越境する機会をつくることなど、今後も自主的に取り組みたいです。

ぜひ、皆さんもオンラインで越境して、普段は得られない学びに出会ってみませんか？

【瀬川さんのコメント】

【日本シティズンシップ教育フォーラム (J-CEF) ・シティズンシップ教育研究大会2024@オンライン】
発表分科会：自由研究発表2-6-1 (研究発表要旨集：pp.60-61参照)
発表日時：2024年10月5日 (日) 16:30-17:00

【発表題目】

**世界標準となりつつあるDC教育と
日本の社会科教育との調和**
—教育実習の研究授業デザイン経験から示唆される可能性と限界性—

発表者：瀬川 正義
(北海道教育大学釧路校・学部4年)

私は昨年の「シティズンシップ教育研究大会 2023」に引き続き、卒業研究で取り組んでいる「デジタル・シティズンシップ教育」の授業デザインに関する進捗報告をしました。今回は、特に自身の「教育実習・研究授業の省察」に焦点を当てて、3年後期から4年前期にかけて考察した研究成果を報告しました。

普段のゼミ内での研究発表とは違い、自身の研究関心や研究過程を知らない方々に向けた発表になるため、言葉遣いに気をつけ、オーディエンスが私の発表をより理解できるよう、自身の学部4年間の学びの履歴や教育実習のプロセス、取り組んでいる研究内容の詳細を発表資料に反映させました。

発表後の質疑応答・意見交換では、大学教員や中学校・高校教員の方々から発表内容に関するだけでなく、卒業研究や来年度の入職に向けた助言をいただくことができました。また、デジタル・シティズンシップ教育研究の先駆者からのクリティカルな意見や他大学の学部生・大学院生との議論は、学内・ゼミ内の発表では得がたい学びとなりました。さらに、他大学の学部生・大学院生が発表する姿からは、新たな知見を得ることができたと同時に「他大学に負けてられない」といった一種の競争心を持つことができました。

他者から知見を得ることだけでなく、学部生で同様の研究をしている同志を見つけ、様々な背景を持つ方々に研究に関する悩みを開示・共有できる場として、「シティズンシップ教育フォーラム」などの外部機関が開催する研究大会やワークショップに参加する意義は十分あると考えました。

ぜひ、みなさんも釧路から飛び出して学問の広さを知ろう！